



talk_07	ACUT2024 × ソノ アイダ東京大学
	美学と感性術のあいだ
	— エステティクス再考2 —

2025,2/21 (金)  
17:00-18:30

長年日本の美学研究を専らしてきた小川麻里氏と、人間以外の存在論に「エステティクス」の視座を置く書齋を駆使しながら「感性術」という視座を最近創出した中村都——初めて顔を合わせると二人のあいだに同僚員の研究室を行き来していた学生の存在時（美学専攻学修生）を彷彿とさせる。エステティクスの二つの視座のあいだに立つ「学」と「術」の交差する領域のや、そこから生み出される感性のありか、そしてそれに対する人間の存在論について語り合います。



有吉玲  
(鎌倉中央)  
留学先-パリ第8大学、  
コンセルヴァトワール・セル  
ジー (CRR, 演劇俳優科)



【 学業と生活 】

パリ第8大学で主に座学を受けた前半と異なり、現在はコンセルヴァトワール（フランス公立の音楽家・舞踏家・俳優養成機関）に現地学生として在籍し、演技訓練を受けています。授業日は7時に起きてバゲットをオープンに入れお湯を沸かしながら支度をし、即席サンドウィッチとスープをお弁当に30分で家を出るといった生活で、体力的にはくたくたでもやりがいを感じています。議論が当たり前のことである文化の中、気兼ねなく教師や同級生と役の解釈や演出方針、演劇のあり方そのものに対して熱く意見を述べられるのは貴重なことだと感じます。そのおかげで、自分はなぜ演劇をしたのか？むしろ、どんな演技/演劇が嫌なのか？という、自分にとって大切な問を、あらたに持ちはじめられたように思います。ご支援いただいた皆さま、周囲に感謝しつつ、稲村ヶ崎の海を思い出す日々です。写真左上は大学提携先であるサーカス学校講義、右下はコンセルヴァトワール授業風景、左下は旧正月のシェアハウスの様子。

【 フランス語での演技 】

高校時代から演劇をはじめて随分経つものの、授業開始から半年してようやく他の同級生と同じような長丁場や長台詞が担当できるようになり、いろんな悔しさを感じていたなと思います。教師や同級生は温かいほど、クラスで唯一の外国人学生として言葉や発音が思うように上達しないこと、日々追われて十分に語学の時間が取れていないことに焦ってもしました。しかしこの頃ようやく自分なりの仏語戯曲への取り組み方、外国語で演じることの強みを実感できています。外国語の台詞の場合、まず辞書を引き引き精読することから始まるため、台詞への先入観を抜き固定的な意味から遠ざかった純粋な「音」に近いものとして丸暗記しやすく、その結果、雰囲気でも表面的に演じるのではなく丁寧に役を構築することがやりやすいのだと考えています。また、戯曲への取り組みが、仏語に限らない私自身の言葉の涵養になっていると感じられ、さまざまな意味で、台詞に緻密に向き合うことが自分自身を知ることになっています。

【 日本との関わりと今後 】

長期休学中の東京大学のアートセンターや総合文化研究科の企画、日本語の現代詩や短歌にパリから関わっていました（右上写真等）。将来的には、俳優としてだけでなく自分たちの団体を持ちたいと思っています。演劇がもつ「場」としての機能から、自分が愛着をもつ土地の文化にかかわりながら演劇をおこない、それを結果的に日本が持続的で住みやすい場所になることにつながる活動にしたいと考えています。この頃は、こんな話を共にしていたロンドンの友人と、往復書簡をおこなっています：[https://open.substack.com/pub/itodenwa?r=2o2zk0&utm\\_medium=ios](https://open.substack.com/pub/itodenwa?r=2o2zk0&utm_medium=ios)

三月末日、パリでも桜が咲きました🌸  
みなさまにとって良い春でありますよう